

ダイズ:晩播きによる吸汁性カメムシ類の子実被害の低減効果

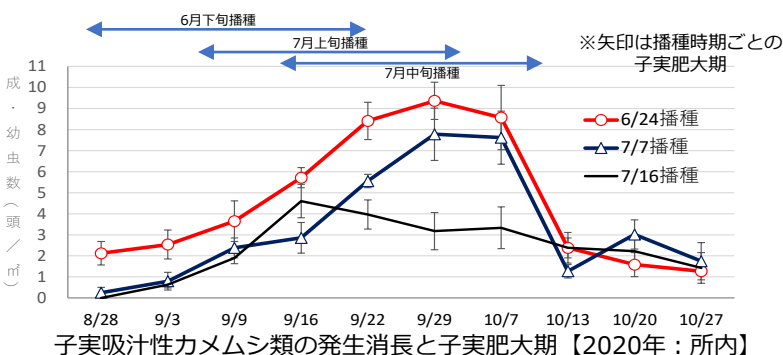
ダイズ奨励品種「里のほほえみ」を安定的に生産するためには、カメムシ類の防除が不可欠です。播種時期を7月中旬まで遅らせるとともに、開花期の20日後頃から2回の防除により子実の吸汁被害を大きく低減できます。



カメムシ類による被害（左下枠内は健全粒）



ダイズ子実を加害する主要なカメムシ類【上段：成虫，下段：5 齢幼虫】



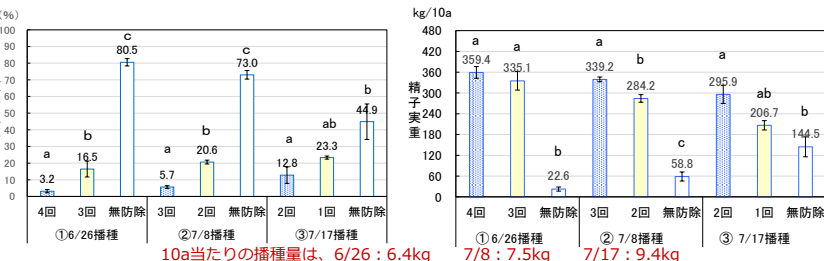
- ①埼玉県平坦地でダイズ子実吸汁性カメムシ類の発生が多い時期は9月上旬から10月上旬です（左図）。この時期はダイズの子実肥大期で吸汁被害のリスクが高まります。
- ②播種を7月中旬まで遅らせた場合は子実肥大期の虫数が少なく推移します。

☞6月下旬や7月上旬播種で無防除の場合はカメムシ類による吸汁被害が基だしく、子実収量はきわめて低くなりますので3回程度の防除が必要です。7月中旬播種の場合は吸汁被害が低減されますが、無防除では減収するので防除は必要です。

☞7月中旬播種の場合は開花期後2回（初回9/10頃、10～14日後に2回目）の防除で被害が大きく低減し、被害粒率は10%程度まで抑えられます。初回防除の1回だけでは効果が不十分となります。

【この試験ではエチプロール水和剤2,000倍液・約300L/10aを散布】

☞播種時期を遅らせると株の生育量が小さくなるため、収量の確保には播種量を9kg/10a程度（約5割増）とする必要があります。【この試験は9.4kg/10aで実施】



播種時期ごとの防除回数と被害粒率および収量【2019年試験の例】
各播種期内に異なる英小文字間には統計学的な差が無いことを示します（5%水準）
グラフに付したバーは標準誤差（n=3）です

☆詳細な試験方法・結果は下記文献に記述しております

- ①『植物防疫』2022年3月号, p2-11.
- ②『関東東山病害虫研究会報』第68集, p27-32.

- ①「里のほほえみ」では播種期を遅らせると生育量不足で減収します。これを補うためには10a当たりの播種量を増やす必要があります。
- ②気候温暖化や長雨・大雨への対応として、8月上旬播種でも減収させないための研究に取り組んでいます。また、温暖化を考慮したカメムシ類の発生動向も継続しています。